



春秋七草
後藤先生
編輯

特1
2026



国立国会図書館 タイトル『春秋七草』 請求記号 特1-2026

ガラス使用

春秋七州序

白井氏藏書

古傳杜預之癖。至系花鐵馬。史哲為有癖。
吾夙有鳥獸系木癖。而不已。自斗柄連凍。
也。亦之嘉儀。祭旌。冠品。堪。亦至。人口。世間。
採取七種。菜其品。古與。今名。案。不同。傳。德。
藝。非。久。矣。彼。含。品。也。不可。不。精。擇。含。足。矣。
以。從。吾。而。好。旌。樹。觀。花。德。也。不。知。老。為。也。
乎。皇。東。素。有。採。旌。七。草。之。名。採。是。亦。是。
以。混。清。故。附。釋。春。七。草。之。次。第。褒。貶。世。俗。

春秋七州序

白井氏藏書



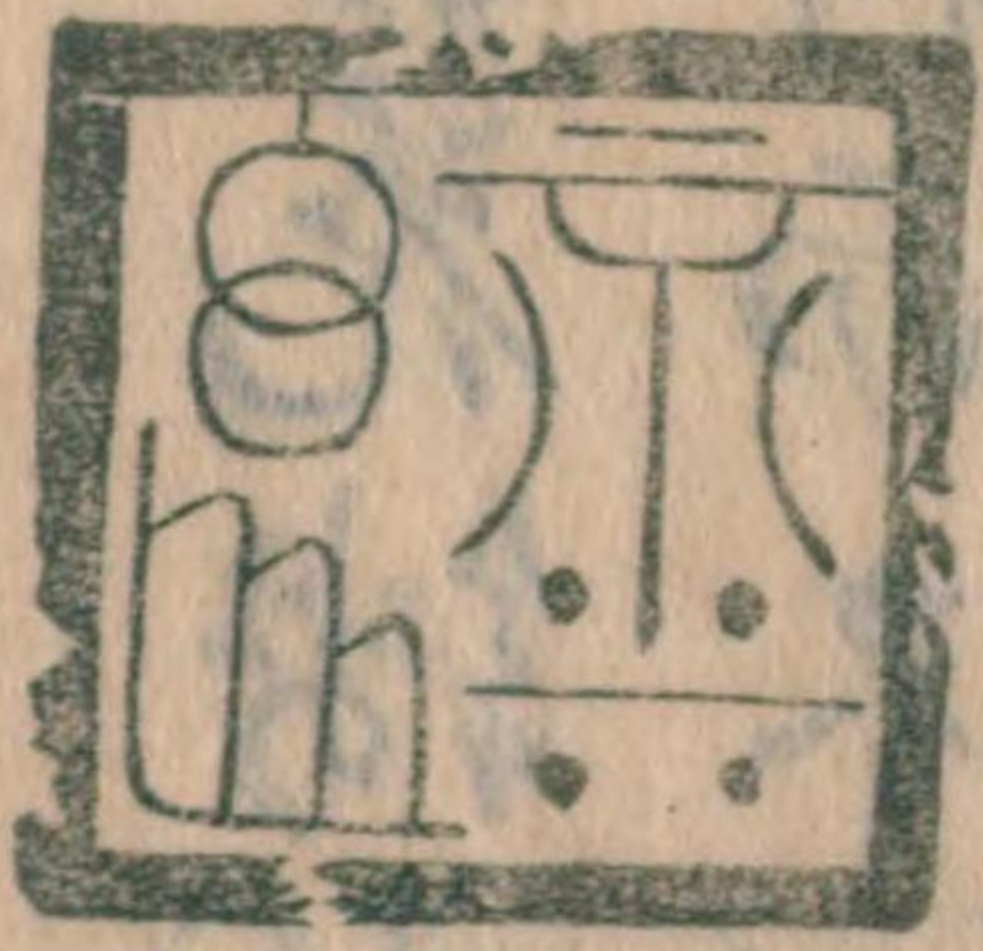
春秋七州

後藤先生

編輯

春ハ睦月の初より君と壽と秋身とをいふ
 中し志るるさぬとて一都鄙家とて
 其供ことくつり中より七日ハ身とて表菜
 善やうとて出づ人々とてりてりてりてり
 刑楚歳時記ハ正月七日為人日以七種菜為羹
 といふ本つとてこのふも古きとてり行ふ

雜說擬魯史名而以目此稿也四時代謝
 萬草不億称謂乖戾不祥予早素維志正
 其圖未也眷慈庭闈不違安身生恐昧
 是學者生以夏進爐以冬焚扇之旌故特
 拈筆以解享保己酉春分日梨書於栢
 仙菴



春秋七州

と云ふも延喜式西宮記北山抄なるとも子^わの目^めに
若菜ホの中ハ入^いるゆも七種の名^なを此^この^こり
ま^まり^りら^らたる^たる^るな^なか^かり^りと^と見^みえ^えく^くま^まり^り

兼明親王の記は延喜十一年正月七日^ニ後院^ノより
七種^ノ以^テ若菜^ト供^ス又^ニ村上天皇天曆四年二月二
十九日^ニ女御安子^ト若菜^ト奉^ルと見^えたり又
花鳥餘情に延長二年正月二十日甲子天子
四十の御賀采女調和^ニ若菜^ヲ供進^スを
生按^スするは^ハ六月七日^ニも^モり^りき^きる^る又^ニ若菜
七種^ノも^モり^りき^きる^ると見^えたり^ハ延長二

年の所賀延長御記は^ハ筍^ノ蕨^ノ梅^ノ柳^ノホの
捧^たお^かと^ハ入^いる^るゆ^も七^種の^名を^此の^こり
す^も後

四辻^ノ大臣善成公の河海抄に曰七種ハ
○藍^ノ蕨^ノ○芥^ノ○薯^ノ○御形^ノ○酒^ノ々^ノ代^ノ○佛^ノ
座^トと^シて^又

一條禪問兼良公の公事根源に曰若菜と
十二種^ヲ供^スる^るゆ^もり^り具^くら^らく^くハ
○菘^ノ蕨^ノ○苣^ノ○芥^ノ○蕨^ノ○薺^ノ○葵^ノ○苳^ノ○
蓬^ノ○水^ノ蓼^ノ○水^ノ雲^ノ○松^ノと^見たり^ハ松^ノの

春秋七草



宇白川院の法時師をよはるる一うは若松と
 出てこわひと讀免りりいふまゝゆかりと
 せし松とてなるといふハヒゲ申つると上皇
 彼作ゆき和名抄は依るハ若松ハ温松の語か
 尋常ハ若菜ハ七種の物なり 藤丸○藜葉
 ○芥○薯○黄花蒿○菜菔○藕 三月
 七日ハ七種の菜羹と食すまハそ人病病か
 又於動を除く術ハゆかといふなり

按すりハ兼良公七種の蔬代とす魚一足
 以下無説多しといふも何れも信用

志す一故予ハ是ハ志すひたハ註とかくゆ
 藻垣草ニ載する七種○まつな○えこ魚り○
 たつせり○山形○邪蒿○すゝまろ○仏の丸
 盞囊抄ニ出たる七種○芥○薯○五行○
 田平子○仏の丸○わしる○みか

按すりハ田平子の名ハ幼白見ハたはあ
 世ハ俗ハ田平子佛の丸一葉二名ハ呼ハ東京
 都ハ土器菜といふ草なり方言ナリ
 て田平子ハ別の葉といふハ一ハ関東色
 めえりハ田平子ハ別の葉なり下ハ辨す



貝原氏、大和本艸に曰國俗人日々用る所の
 七種ハ○芥○薺○鼠麴草一名佛耳草
 倭名母子草或為黃花蒿為邪蒿者冰也二
 物正月未生苗○藜藿○佛座一名田平子
 ○菘是蔓菁之類和俗稱之曰菜在水田
 稱水菜又曰浮菜在陸田稱畠菜於諸國
 稱京菜○蘿蔔大根也
 按すゝ鼠麴草とこきやと訓まらるゝい
 り鼠麴草ハ母子草とつる名ありと文
 德實録おもしく見くたまハ古き名あり

こきやハ別種ありともや黃花蒿なりと無
 良公の記一重之ハ古き名ありと誤ハ
 いさゝ一黃花蒿三月苗出さすといふと
 暖かる前ハ生す多し予々圃中より幸々
 一系ハある半つるをの比よりらんす辨
 又下り辨を南時佛の花とつる系幼生
 ハ葉蓮の花に似く定りて花より定る系
 莖は竹く燈臺草に似く二月以下葉
 花と定る草ハさけ菜とてりて救荒

本草の如くは嬰々指申葉なりと松園去達
 へつり是とびびりころもふ ○周東より
 たびりころとて草ハ本茶綱目は戴する黄
 瓜菜え葉の飛薺又ハらんはふ似てやく
 茶立矮く二月菊花のころとて菊花と完
 くい系救荒本草の黄鶴菜なりと寺嶋良
 安の説 ○右の外又黄死葉又苜蓿の二種
 かく七種とて又種救粟稷稗又苜蓿と
 加へて七種とて説わりといふもゆきも
 説りり也こゝに畧に今俗間は七種の菜と七

日よ粥よ入を用ゆるり誤かりぬ七種のうゆ
 八月十日より由公事根原は毒くえへり
 こゝろよとぬちたるものゆへ一若葉ハ
 美として今俗よりあけのあひかり又俗よ
 七種ともをちりしそ 唐古の鳥と日本の
 名ともさうぬさうぬとて説わりを臺
 僕の説たりといふと郭氏の玄中記は
 桃都山上有大樹名曰桃都枝相去三千里
 上有天鶏日初出照此樹雞即鳴天下雞
 皆隨之鳴といふなりとのゆへやけ桃都

と唐土よりわやありたるく一日の鳥

とりを鶏と云々難かるき一日

記は初く出るるハ鶏なり ○中華は

も七種の菜との 荆楚歳時記は載せ

て名目いろいろのものや 考を以ては張

韶美の群書拾唾は七種の名目あり是

正月人日のゆりあては外は是とも知る中華の

書はしつゝえあるるゆ 志を以て是と

つゞ若くはこれより七種 ○鬼葵 ○巡

○蔓菁 ○葵 ○芥 ○落 ○筍 ○ホヤ

鬼葵ハ本州綱目ハ其最ホ者名鴨脚葵と云

この落ハ康熙字典ハ曰與芥通すと云

中華ゆてハ七日の菜ゆては七種と云及

たり唐の杜氏通典歐陽詢の藝文類聚

なとめは歳時記と別をるを切りぬてあ

るハ又ハ錦繡萬花谷ハ曰正月七日登

岳望四方得辭陰陽氣除煩惱之術也と云

馮應京の月令廣義ハ七日煎餅薰天とい

世諺問答ハ正月ハ少陽の月又七日ハ少陽の教

なり仍く於延と云ハ先私の考よりするやん

會と俗すかりといふを
籃篋内傳ハ七草の彌ハ不勤明王七祀の髪
みく悪魔と降伏すとく

ニギハヤ

えこが



なづな

せり

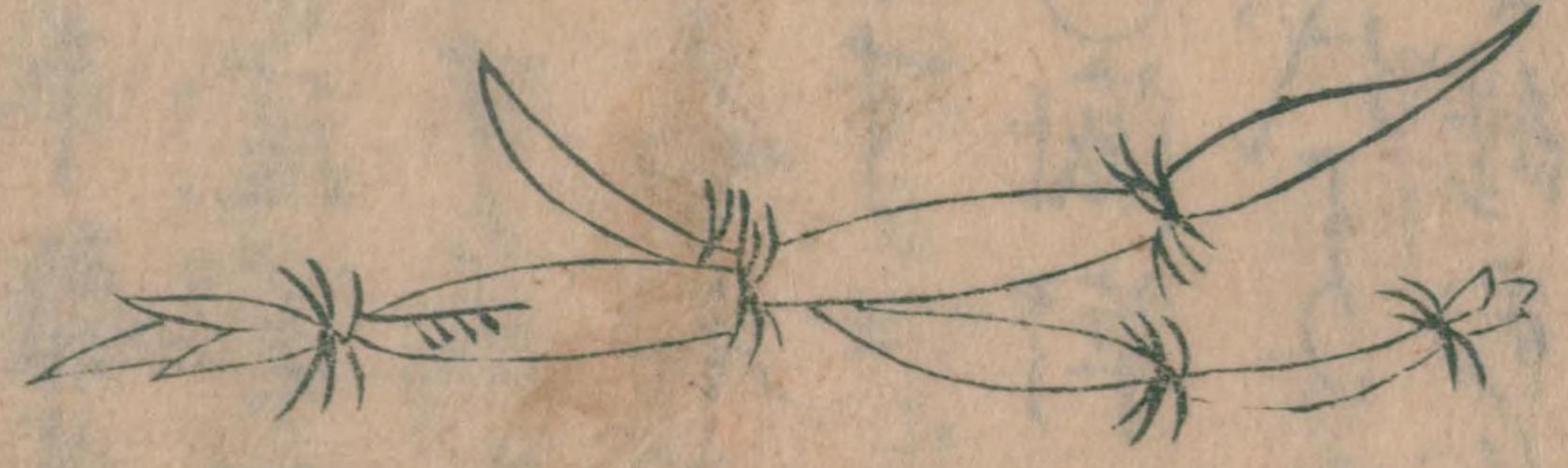
すぢ



すぢ



やぶぢ



○薺シロ

名

護門草

ハ系中華ニト上古ヨリ

菜類ノ用ハハルルヤ 詩經ニモ其其シロ如薺
トヨク是ヨリ目ヤクモ延喜式供奉雜菜
の中ニシ薺四升ト見えルハ古ク蔬菜カ
コハ系ノ切利肝和中目ト明ニスル統カ
且肝ハ春ニ旺ルルハ春ノ物ニ用タスヤ名稱
形状諸國ニ同クハハルル略ス

○藜シロ縷シロ名

○藜シロ縷シロ名

○藜シロ縷シロ名

○藜シロ縷シロ名

○藜シロ縷シロ名

○藜シロ縷シロ名

○藜シロ縷シロ名

鶯腸菜シロ是ニ爾雅ニセテ上代ヨリノ
菜ニヨリ時珍曰蔓甚繁ク莖中ニ縷シロカ

心ノ名付クハ系汁ト云ハリテ法ノ恩蔭シロノ
塗ニ切シロワリ又南蠻シロノコトハハルルハ兒胎毒諸
瘡ニ用テ切シロワリ

○芥シロ名

○水英シロ名

○楚葵シロ名

足ニ爾雅ニ出ス

足ニ爾雅ニ出ス

足ニ爾雅ニ出ス

足ニ爾雅ニ出ス

日中ニ舊事記ニ芥田物部ト云人々ハ
上古ヨリノ菜カハ萬葉集ニ見ル山田ノ民ハ
是ノつとモ香ハハルルノすハぬモぬトシ
ハ是ノつとモ香ハハルルノすハぬモぬトシ
ハ是ノつとモ香ハハルルノすハぬモぬトシ
ハ是ノつとモ香ハハルルノすハぬモぬトシ
ハ是ノつとモ香ハハルルノすハぬモぬトシ
ハ是ノつとモ香ハハルルノすハぬモぬトシ

芥

芥

とくは名目より出る名もや

○黄花蒿異名 ○臭蒿 ○草蒿 俗よくさうも

きとふ草なり常の艾より葉の多く高さは

尺のひさしより細く淡黄の花と異く香

臭さぬはよく邪鬼毒と止む功なりハ歳首

は用りや中華をハ馬齒莧と五行草と名くは第

蒿と藻塩草と名くは訓一又延喜式ハハ齋

蒿と名くは訓一萬葉集人丸の哥は野上の

は似く香一美作く食ふと北村季吟の詠

按ずるは莪蒿 本州蘆蒿の條下は戴たり陸

機り詠は據はハ今俗といふこきやを一然まハ

上古のれもさいつハ中右ハ草のこきやを

○菜菔異名 ○蘿蔔 ○紫花菘 ○温菘 ○土

酥 ○蘆薈 ○雹突 和俗よハ大根と雨

雅の註は似蕪菁大根とハ根の白さといふや

あまハすハ葉は對し根の白さといふや

かこらるはともいふ藏玉よハハ葉は中も

まやさくは葉といふつまはあつるや

是大肉多て正月一日餅おの上めたハ大根

と部氏年中故事要言ハハすく志ろハ蕙ハ
 己とつゝ蕙ハ蘭の類ハ葉乾カワシ大根ハ
 菜中第一の嘉品ナリ薬功モ揚色ナリ氣と
 下すゆと專し以品類多し尾張宮茂の産
 及ハ本曾の産ナリにすそ外諸列是く
 有り○攝列天滿宮の前大根形細く長く軟
 有り本州の蔓苜蓿蘿蔔王蓋臣ハ群芳譜の
 水蘿蔔苜蓿ナリ魚ハと貝原篤信ハ有り○三
 月大根有り江陰懸志の揚花蘿蔔苜蓿ナリと
 縮若水ハ有り○伊吹大根江州伊吹山ハ自生

す根短く肥大し其末鼠の尾ハ似て小く
 長し味甚辛く煮熱スルハ本ハ蘿蔔大根ハ
 ○紫大根有り莖ハ根モむつ々ナリ○
 暹羅大根有り葉大志根赤く根と截スル
 色ハ赤白の雲珠散わり又塩え菜ナリ○茶
 野大根有り形細く長し相列ナリ野ハ自生
 す今ハ耕カトカク作ル救荒本草の野蘿蔔
 苜蓿ナリと若水ナリ○藕○蓮○芙蓉○芙
 蕖○水葦 蓮の根ナリ葉と荷ナリ蓮葉
 實の名ナリ花と藪苜蓿ナリと云莖と茄ナリハ

春秋七草

十一



卯名義本州は委一此菜松のたつ異儀あり
唐くは故は中華は六花の葉と佛を髪と名
くあるは南世佛のたつと平子と
云又蓮花葉とも云又前々大平記は車前
葉と云く佛のたつと名はくはるも附會の
説なり按きくは蓮根かと佛のたつと名は
きれりはよしと七種の葉は南世は
省一八歳首嘉儀をるは佛の名と名は
のりては唐くは蓮は佛法つとて來りたる
前よりは茶めく詩經を是くはるは古き

草なり日本の俗やもすれは蓮と名はるは
中華ははるる日本は花の葉は其徳と君子
と比一又大阪の芙蓉かといはて養人は擬
ら賞義ありて古今ありてはなは年始
佛法といひといは實説いはるさくす既
二月八日より禁中の真言院をく御修法
行する由公事根原は見えたり又山野市中
よりとては年始は萬歳といふ者ありて諺
と聞は現濕繁の文と中くは日出るはとい
面方便

春秋七草



あや といふとくく蓮さしをさるるの

虎花

とまれば

ふん



たまり

あや

あや



あや



四運忽あうん たちまう又代序たいしよを萬物ばんぶつ紛まじくとして迴薄くわいはくをとく

誠まことに秋の野のに草花くさな種かた々々多おほき中なかも萬葉集

第八山上やまのうえ臣の憶良おぼろ秋野あきのに花詠はなうたする和歌二首

秋のあきののはは咲さくは花はなとともも秋あきのの花はなとともも秋あきのの花はなとともも

七種しちしゆののななか

茅ちの之の花はな半な花はな葛くわ花はな瞿くわ麥ま之の花はな姫ひめ部ぶ志し又

藤ふじ袴はかま朝あさ鵜う之の花はな

○茅ちの 茅ちの系けい集しゆ又又萩はぎのの字じ又又榛はらのの字じとと用もち白しろ順じゆん

和名わなハ鹿鳴かめい系けいととははとと訓く一いつ回かい史し又又ハは芳ほう宜い草そう

とと云いハは秋あきのの字じ今いま多おほくく是こゝとと用もち也なり志しりりとと爾に雅みやび及及び

ひ説文せつもん亦またハは萩はぎハは蒿こうのの類るいとと言いハはははとと訓く也なり

今いま康熙こうせい字典じてんハは萩はぎ又又通とほ楸きゅう木ぼく名なととししりり若わ水みづ

以も東とう貝がい原げん氏し松しょう園えん氏し何なにをを王わう路ろのの花はな史し又又出でたたるる

天てん竺ぢく花はなととししりり又又救きう荒かう本ほん草そうのの胡こ枝し子こ

ももししりり又又疑ぎわわるる魚う々々一いつ名な隨じ軍ぐん茶ちとと

りり本ほんととししりり又又顯けん昭しょうりり曰い本ほんをを

ととししりり又又新しん野のああららけけるる是こゝ字じりりけけるる西せい

國くに乃のハは北きたををしし極ごくにに用もち日ひ也なり往わうををししりり是こゝとと

權けんををししりり又又古こ今いま集しゆ又又文ぶん城じやう野の
のの切きりりのの本ほんととししりり又又露ろれれををししりり又又侍しとと君きみ

春秋七草

十四



成しをよんと讀しも亦なきなり新古今集
 よ及りののち此の古枝ハくれみりしをわ
 るハなやわわらんと讀しハ草を代りた
 此の草成草を代りて吞じしハ救荒本草に
 及くなりハ草和名おきなり ○秋蓬草 ○庭
 見草 ○古枝草 ○紅草 ○ねり草
 ○平花 尾花ありを花獸の尾ハ似る也名
 く又すきとつふ時珍曰芒七月抽長莖開白花
 成穂如蘆葦花といふハありハ紫葉集よ
 くさうりやきやそれとハ新勅撰ハ尾花

うらなと入るいふことすしきなりとハ覺律所の
 説より諸草多しとくハ草花と云くハ紫葉集
 されをよとやなりまじりの草あり也ありと
 中葉の説の字とす此と割す中葉の
 説ハ合は薄ハ厚薄の文字とすハの
 一尺ハとハのつと云すハのさきハ
 蕪方のハハと云すハのさきハ白
 如のさきハと云す
 ○葛花 異名 ○雞齊 ○鹿藿 ○黃竹 花ハ
 紫藤の花ハ細く白く美く白くハ飄

春秋七草

同立也（和哥）もこのの...
 赤あき水... 一番...
 上... 土人布... 吉野と上...
 薬用の葛根ハ金剛山と上... 丹波ハ...
 ○ 瞿麥 ○ 蘧麥 ○ 巨旬麥 ○ 大菊 ○
 大蘭 ○ 石竹 ○ 南天竺草 ○ 燕麥 ○ 杜姥
 ○ 莼萋 ○ 洛陽花 今...
 家栽者花指小嬢媚有細白紛紅紫赤斑
 爛類色俗呼為洛陽花... 石竹

後類の... 石竹...
 ... 石竹ハ...
 ... 紅色勝...
 ... 石竹...
 ... 甚古の
 ... 花...
 ○ 姫部志 朗詠集源順の詩ニ花色如
 蒸栗俗呼為女帚 是ハ女帚花也

氏文集題 木蘭花詩曰應添一樹女郎花
 といふ 靈思志はこれに是女郎花ハ菊花
 なる本州の敗醬とれ多し 一かいと古人の
 説なり 志はこれに本州の説は敗醬ハ今
 といふ好衣草 又鋸葉とも名あり
 ○藤袴 い葉は三四尺ありてわくわく葉はこれ
 なり 似て秋の風をむすの死にあつたり
 ひく中華めくとも日わくとも古蘭といふ葉
 たり 詩經楚辭文選なりと詠きり蘭なり
 延喜式なりと葉は干蘭と出くぬしをいふ

とくく 中華めくとも薬ハ蘭葉と用る 東
 垣李卓ハいぬしを名と用ひ 丹溪朱震亨ハ
 誤りて蘭花の名と用ひ 蘭花といふハ名
 蘭とも又建蘭ともいふ 葉ハ大葉の名草ハ
 似て秋の香と賞する 草ハ形状甚蘭
 它別なり 和哥より中よりあるハぬし袴なり
 ○朝顔 中華めくとも木杖とも木なり 葉
 ハ水すあつ木杖と轉語してむく事又俗ハ
 ちちすといふ花ハ白紫咲分ハ重一重なり
 わり中古よりいふあつるなりハ籬ハ高木と

春秋七草



纏まとひ夏秋碧色あきあき淺あはき白しろなまの花とひひく
 弟あにああく上古のああるるななああつつはは南なん時じのああるる
 ハ牽けん牛ごうああといいくく和歌わがああししけけああここここああるる
 古今集物名こきんしゅうぶつなよりちつちつああここここああるるとといいふふ
 たくたくああるる花はなのそそむむええううりりとといいふふはは花はなををりり
 在あららののああるるとといいふふ和歌わがああししけけああここここああるる
 ハ乾かん花はなとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
 たりたりりりののくくももりりたたるる目めああららははああららああらら
 ここきき海うみののああららとといいふふ八雲やくもの御説ごせつハハ河か流りゅう後ご
 世よのああららるるハハ合あははれれ木き槿ぎんハハタタりりけけももああららるる

花はなををりりハハ哥かりり知しるるとといいふふとといいふふ
 知しるるななとといいふふとといいふふ異い名なつつららるる甚しおお遠とほなるる
 花はな一いつつつののああららるるとといいふふとといいふふ
 和名抄わなごう又また牽牛けんごうははああららるるとといいふふ又また源氏物げんじもの
 語ことば野の分ぶんのの卷まきははああららるるとといいふふ
 ままももとといいふふハハ是こゝもも蔓つたなああららるるとといいふふ
 ううままハハ源げん順じゆん式しき部ぶ比ひりり知しるるとといいふふ蔓つたなをを用もちひひ
 ちちとと又またくくたたりり木き槿ぎんとと藩はん籬しき草くさとといいふふハハ是こゝ
 ちちもも又またくくたたりり蔓つたな草くさははああららるるとといいふふ
 又また萬葉集まんやふしゅう七しち草くさの中なかああららるるとといいふふ

是も草と云ふは此の如きものなり秋野の
七草わさな木槿ハ野にも自生するものなりあき草牽牛
花ハ人家の種も多し野にも自生せ
ざるはくも知る魚いし如く是の如きもの
古と今とをわきましり名稱すくはるは
上古ハ顔えん舜しんの花の如しとて目出度多し
よしたるを尚時ハあき草の如きを言ふ
なすも人の心をつらむるなり

春秋七草終

寛保二壬 戌 正月中旬

梨春先生 著

梧陰雨 編

龍宮船

嗣出

望雲堂
物産目録
左傳名物解
調辯道
經學策
百花譜
天錦鈔
珍刀圖
大便經
和漢合鑿本草
芭蕉行狀記

黎春先生撰述書目

望雲堂

物産目録

左傳名物解

近刻

都老子

調辯道

未刻

温泉名勝志

經學策

同

河豚禪

百花譜

同

燧石囊

天錦鈔

同

尺八志

珍刀圖

同

春秋七草

大便經

同

呂船

近刻

和漢合鑿本草

同

平傳畧

未刻

芭蕉行狀記

同

特1
2026





国立国会図書館 タイトル『春秋七草』 請求記号 特1-2026

ガラス使用